

「データベース：米国シェイクスピア研究学位論文」 が表す米国の特徴 その二

草薙 太郎

1. はじめに

本稿は同名の論文の「その一」に続き、データーを更新した続編である。

以下、「その一」と同文の記述をしばらくする。文部科学省科学研究費補助金やドル減らし予算などを使い、富山大学人文学部の研究室に1990年頃から収集し、随時オンラインのデーターベース化に取り組んでいる米国シェイクスピア研究学位論文のコレクションから、米国の文化的特徴が読み取れる。

まずこれら米国シェイクスピア研究学位論文を、米国の（1）移民の国として様々な価値観が混ざり合いボーダーレス化する特徴（2）そうはいつつも西ヨーロッパの文化の伝統を色濃く残している特徴（3）競争社会として社会のヒエラルキーを駆け上がりマイノリティーがメジャーになろうとする（フェミニズムが典型）圧力のある特徴を表すものに、三分類する。このことで、逆に分類項目として挙げた米国の特徴が浮かび上がると考える。

なお本稿は、そのまま学術論文の形式によるデーターベースとしての役割も付すため、脚注の論文名の後に富山大学図書館請求番号を付け加えた。

以下、分類項目は動かさず、更新したデータについて述べる。

2. 米国が移民の国として様々な価値観が混ざり合いボーダーレス化する特徴

この項目はさらに細分して(a) 心理学、臨床心理学などと関連するもの (b) 枠にとらわれない米国流自由研究 (c) 映画に関連するもの (d) 多民族国家、植民地政策などに関わるもの (e) 語学的考察に近いもの (f) 実際に演じることからの論考 (g) ホモセクシュアルに関わるものに分ける。

(a) 心理学、臨床心理学などと関連するもの

ボーダーレス化の特徴は「学際的」考察にあらわれる。ユング派の臨床心理学でなくとも、アイコン、エンブレムなど、イメージアリーに関わる考察があったり、宗教について考察し、聖俗の感覚のあるものは、すべて、極めて広義な意味で「心理学」と関わるのがアメリカの特徴ではなかろうか。

さて、最終章で12世紀フランスのキリストが踊るアイコンとエンブレムを掲げ、ユーモア、

楽しさに神意が現れることを提示し、禪など、キリスト教以外にも例があることをいう論文¹がある。聖なる道化の概念をシェイクスピアに導入し、道徳劇からの発展を道化論に適用する。フェステからリア王付きの道化への発展で、狂気を制御する道化を指摘し、ハムレット、ハル王子などの道化性も、聖俗のバランスをとる者との立場で解析する。「祝祭喜劇」論と道徳劇、エンブレム論の結合した論考といえる。

シェイクスピア、ジョンソン、ミドルトンばかりか、アフラ・ベンまで加え、17世紀英国の資本主義が封建体制を崩壊させていくことを、レヴィ・ストロースの文化人類学的視点や、各種の社会学、社会哲学、心理学的視点で考察した論文²がある。

プラトンからロラン・バルトまでの肉体論を展開する中で、『尺には尺を』など、シェイクスピアの作品もとりあげる論文³がある。

(b) 枠にとらわれない米国流自由研究

シェイクスピアの『ソネット集』のテキストが、必ずしも著者、“I”で語られる主人公の詩人が一致したオーサーシップの概念でとらえられないことを論じることで詩論を展開する。それを他のルネッサンスのソネット（ペトラルカ、ドレイトンなど）にも適用する論文⁴がある。

「礼儀正しさ」を観点に、貴族であることと、紳士の概念のずれなどを歴史的に考察し、「礼儀正しさを説く文献」を手がかりに、ハル王子の成長や『十二夜』を読み解く、イギリス的自己知論や成長論を、大陸のカトリシズム背景の考察に置き換えたような議論をする論文⁵がある。『ペリクリーズ』をめぐるオーサーシップ、作品の評価など、様々な問題を、19世紀、20世紀に絞って著名な英文学者、批評家の意見を中心に、まとめたもの⁶がある。

『ルクリース』『タイタス・アンドロニカス』だけでなく、シェイクスピアの詩的表現の根幹に「強姦」（レイプ）があって、「略奪愛」（ラヴィッシュメント）と女性の同意を無視し女性を家父長の財産とみなす法体系では同一視され、『オセロ』や『マクベス』（ダンカン王殺しが、

1 Pyle, Sandra Jean, *Holy Madness: The Ministry of Shakespeare's Fools*, (1996). 富山大学図書館請求番号 MF||194||12 (以下同様)

2 Roh, Seung-Hee, *Determinate Contradictions in Seventeenth-Century Drama: Inheritance, Gender, and Exchange in Shakespeare, Jonson, Middleton, and Behn*, (1995). MF||189||72

3 Liberta, Angelo M., *In the Name of the Body: The Body in Discourse from Plato to Barthes and Beyond*, (1996). MF||194||7

4 Cusk, Sarah, *Scattered Readers, Scattered Rhymes: Authorship, Publication and the Renaissance Lyric Sequence*, (1997). MF||194||6

5 McCarney, Margaret R, *Renaissance Courtesy Theory and Development of English Drama*, (1995). MF||189||81

6 Skeeel, David Bradley, *"Thwarting the Wayward Seas": A Critical and Theatrical History of Shakespeare's Pericles in the Nineteenth and Twentieth Centuries*, (1995). MF||189||83

まるでタルキンがルクリースを強姦したように描かれる)にまでそうした考察対象が広がるとする論考⁷がある。男性の性欲はその都度充足するのに女性の性欲は悪魔でさえ満足させられないので女性を魔女とみなす取り扱いが出てくる、といった観点から、シェイクスピアの初期のコメディを分析。祭りで終わるのは男性の性欲充足を隠しているといった鋭い指摘をする論文⁸もある。

(c) 映画に関連するもの

今回のデータ更新では、この分類項目に該当する論文はなかった。

(d) 多民族国家、植民地政策などに関わるもの

インドで非宗教的植民地教育としてシェイクスピアなど英文学が採用され、白人と非白人の対峙が教育される意味を、第三世界の女性である論文の著者の視点から解析。白人という自己と非白人という他者という概念をたて、ニュークリティシズム、フライからラカンを経て、ポスト・コロニアリズムに至るシャイクスピア批評を踏まえて論評した論文⁹がある。

アイルランドの植民地化は、イングランド化したアングロ・アイリッシュの植民地化という複雑な面がある。そうした微妙な関係を、16世紀の資料や『リチャード二世』をもとに解析した論文¹⁰がある。

アフリカ系アメリカ人の女性として、シェイクスピアの立場を解析し、全体として有色人種への理解がシェイクスピアにあったとする論文¹¹がある。『ベニスの商人』のモロッコ王の台詞から、『夏の夜の夢』のハーミアとヘレナのちょっとした浅黒さをからかう台詞まで、引用例解析の詳細さが論文作者の敏感さを反映している。アフリカ系黒人作家の作品について、シェイクスピア分析成果による解析もする。シェイクスピアの『ソネット集』にも反映した差別意識の敏感さが主眼になっている。

(e) 語学的考察に近いもの

今回のデータ更新では、この分類項目に該当する論文はなかった。

7 Faherty, T. J., *Shakespeare's Poetics of Ravishment*, (1995). MF||189||60

8 Handelsman, Hilary, *Death and Disire/power and Eros in Shakespeare's Comedies*, (1995). MF||189||73

9 Gavaskar, Vandana S., *Post-Colonial Shakespeare: Fictions of Self, Fictions of Others*, (1995). MF||189||76

10 Glover, Laurie Carol, *Colonial Qualmas/Colonial Quelling: England and Ireland in the Sixteenth Century*, (1995). MF||189||67

11 Birge, Amy Anastasia, 'Mislike me not for my complexion': *Shakespearean Intertextuality in the Works of Nineteenth-Century African-American Woman*, (1996).MF||194||5

(f) 実際に演じることからの論考

『シンベリン』の舞台の変遷史を探求した論文¹²がある。王政復古期にはセンセーショナルな改定が行われ、ギャリックなどで成功し、その後アーヴィングとエレン・テリーのような名優で人物像が変化しつつ、時代によって寓話化したり実験劇化したりする過程を追う。

マクベスの演技について才能と技術の観点からスタニスラフスキーを援用しつつ、実際に演じた体験を元に独自の演技論を展開するもの¹³もある。高校で演技を含めてシェイクスピアを教材とした実践的論考もある¹⁴。

(g) ホモセクシュアルに関わるもの

シェイクスピアとホモセクシュアルの関係について、歴史的展望をし、19世紀のオスカー・ワイルドとの関係から、20世紀初頭の浣腸を持ったイアゴー、最近のAIDSの流行にまで言及し、最後は、それらが逆に異性愛尊重を生んだとして、それがアイダホ州の感覚だと結ぶ論文¹⁵がある。また世紀末とワイルドとホモとの関係で、ワイルドがシェイクスピアのソネットをホモ裁判で持ち出したことを例とし、リチャード二世の女々しさと芸術好みもあわせて、ホモ論を展開するもの¹⁶もある。

3. 米国が西ヨーロッパの文化の伝統を色濃く残している特徴

この項目はさらに細分して(a) 主として英国と関連するもの (b) 英国以外の西欧各国文化と関連するもの (c) 西欧文化全体と関わるものに分ける。

(a) 主として英国と関連するもの

カトリックは集団、プロテスタントは個人という常識をくつがえし、英国教会の祈りの分析から、英国教会の方が集団での祈りをコモン・プレアで強制し、意味のわからないラテン語祈

12 Eaton, Barbara Louise, *Journey's End: A Theater History of Shakespeare's Cymbeline*, (1996). MF||194||17

13 Sturdevant, David Conaway, *The Fusion of Talent and Technique, An Actor's Approach to the Role of Macbeth*, (1997). MF||194||3

14 Rose, Liisa Marie, *Shakespeare in High School Drama: A Model for Active Learning*, (1996). MF||194||4

15 Jun, Joon-Taek, *CounterCanonizing Heterosexuality: Sexing Shakespearean Male Bonding*, (1995). MF||189||80

16 Rock, Paul J., *From Boys to Men: Male Identities, Sexuality, and Fin de Siecle Criticism*, (1995). MF||189||77

禱に参加するだけのカトリックより集団性があることを主張する論文¹⁷がある。この見地でジョージ・ハーバートやミルトンの詩などを分析もする。

自殺を論じながら、オフィーリアなどはあまり問題にせず、スペンサーの詩、リチャード三世の墮落、ミルトンの詩を問題にし、英国教会の教義を問う論文¹⁸がある。神の墮落に言及するシドニーとルターを対比させる。演劇的誇張を廃し、キリスト教国に生まれた人間の絶望を正面から見つめて英文学を眺めたらこうなるかという点で興味深い論考である。

騎士で恋人という人物設定のシェイクスピア喜劇に注目し、男性同士の絆や相克の解決として女性が使われることを分析する論文¹⁹がある。女性のヒロイズムも家父長主義への従属的側面があることを指摘する。ホモセクシュアルな問題をヘテロセクシュアルな愛を利用して解決する観点を見落とすために、キリスト教を前提としたフライ、グリーンブラット、ユングの論理的矛盾が生じると指摘する。

幼い頃聞いた物語を作品に生かし、シェイクスピアは民俗学的視点をとるとする論文²⁰がある。ほら話(tall tale)と『ヘンリー四世』、ポローニアスの教訓と『ハムレット』、オセロがデズデモナと結婚するきっかけになった物語と『オセロ』を中心に、他の作品についても、たとえば『十二夜』と民話の分析からルネッサンスのエピファニー感覚がわかるといたり、アメリカのほら話(tall tale)分析を援用したりして、単なる民話との比較を超えた文学性の分析もしようとする論考である。

オースティンが恋愛・結婚に限定した世界をつくりあげたような、虚構論で、オービッドの『メタモルフォシーズ』の影響なども考察し、悲劇の後にくる虚構世界の中の人物像としてのプロスペローを探求した論文²¹がある。

宮廷恋愛、家父長支配の伝統の中でシェイクスピアは『恋の骨折り損』で、初めて男女を平等に取り扱ったルネッサンスの作家であるとする論考²²がある。フェミニズムの視点ながら、それを前提として、その伝統がすでにシェイクスピア時代の英国にあったことを指摘することにもなっている。

17 Targoff, Ramis D., *The Subject of Prayer: Models of Public Devotion in Early Modern England*, (1996). MF||194||10

18 Bohach, Gretchen Stockton, *Desperate Measures: Spenser, Shakespeare, Milton and the Renaissance Man of Hell*, (1996). MF||194||11

19 Woodson, Michael, *The Bond of Male Discontent in Shakespeare's Soldier-lover Comedies*, (1996). MF||194||13

20 Kelly, Charles Greg, *A Folkloric Analysis of Narrative Context in Shakespeare*, (1996). MF||194||14

21 Harrelson, Leslie Jane, *Prospero; A Post-Tragic Figure*, (1996). MF||194||16

22 Tanner, Virginia Elizabeth Dally, *Comitatus: Shakespeare's Joust with Convention in Love's Labor's Lost*, (1997). MF||194||2

ベドラムのサイズ、病院から救貧施設への変遷、救貧法との関係、プロテスタントのチャリティーの考え方など、実態と狂気を誇張するジョンソンなどとの違いを論じ、シェイクスピアの『リア王』を論じるもの²³もある。

スペンサーの『妖精譚』、シェイクスピアのロマンスものを、古典の哲学を援用した「驚き、不思議の啓示」といった観点で解析する論文²⁴がある。詩論を演劇論に展開する。

(b) 英国以外の西欧各国文化と関連するもの

シェイクスピアの悪役が雄弁なことの本質はマキャベリズムを行動に移すことにあるとする論考²⁵がある。『コリオレイナス』の歴代の批評を踏まえた伝統的な考察ながら、作品をシェイクスピア悲劇の典型とした結論と、主人公の動き、心理の読みと古典文学の特殊性を読み込まない点に米国が感じられる論文²⁶がある。

(c) 西欧文化全体と関わるもの

今回のデータ更新では、この分類項目に該当する論文はなかった。

4. 米国が競争社会として社会のヒエラルキーを駆け上がりマイノリティーがメジャーになろうとする圧力のある特徴

この項目はさらに細分して (a) フェミニズムに関するもの (b) 社会学的な考察をするもの (c) 政治に関わるものに分ける。

(a) フェミニズムに関するもの

シェイクスピア時代の魔女狩りの状況で、大陸はセックスを強調するが、イングランドがそれ程でなかったとする通説に対し、シェイクスピアでジェンダー問題を論じる論文²⁷がある。最初の四部作（『ヘンリー六世』三部と『リチャード三世』）で家父長が権力を持つ中、女性嫌悪の精神土壌があって、生贖の羊としての魔女が描かれる。同様に『間違いの喜劇』でそっくりな双子がいる情況が、『オセロ』『アントニーとクレオパトラ』『マクベス』で不完全な想像

23 Jackson, Kenneth S., *Bedlam, Charity, and Renaissance Drama: Reconfiguring the Relationship between Institutions in History*, (1997). MF||194||1

24 Behuin, Robert T., *The Renaissance: An Age of Classical Wonder*, (1995). MF||189||75

25 LaMonda, Leigh Caroline, *Machiavellian villains : evil eloquence in Shakespeare's Richard III, Macbeth, and Othello*, (1995). MF||189||79

26 Jamal, M. A. Y., *Shakespeare's "Coriolanus" in context*, (1995). MF||189||59

27 Marks, Elise Anne, *"Excellent Witchcraft" : Shakespeare's Witches and the Trial of Gender*, (1996). MF||194||9

が、『冬物語り』で家族の再構成が魔女の力と結びつき、男性の変身、女性の癒し、日常性などが対比される。女性を本とみなし、そこに書き込む行為を比喩につかうシェイクスピアのテキストを中心に、当時の女性の権利関係も考察し、読み書きの教育における性差別にも言及する論文²⁸がある。

実際に男根が隠れていただけで生物学的に男性であった者が女性とみなされていた時期から男性に「変身」した例などを解析し、肉体論に向かうフェミニズムの流行にのって、シェイクスピア時代を考察した論考²⁹がある。英語が少し日本人に分かり易いという以外、日本人としてのアイデンティティーは感じられない論考である。

結婚を女性の拘束状態ととらえることがルネッサンスのイギリスにあったことを、グリーンブラットのコンテインメント（原住民を脅すような間違ったキリスト教観を与える植民地政策を表現）、「くびき」というシェイクスピアなどの表現、当時のピューリタンなどの文章をもとに解析した論文³⁰がある。ジャンヌ・ダルクのドラマのキャラクターとしてのイメージをルネッサンスから列聖時期のアメリカの反応、バーナード・ショーの取り扱い方まで、フェミニズムの観点から論考した論文³¹がある。

(b) 社会学的な考察をするもの

マクベスがダンカン王殺害の罪を、血を塗りつけて他人に押し付けた虚偽がばれるのではなく、自らも手が血に染まるという幻影が実現してゆくのが作品の展開だとする論文³²がある。血塗られること（外面性）が一人歩きする環境に、当時の大衆、商品流通、文学の関係があったとする。ヘンリー四世、五世をめぐるシェイクスピアのシリーズなどを、こうした考え方で解析する。

(c) 政治に関わるもの

『タンバレン大王』『オセロ』といったイギリス・ルネッサンスの作品の東洋趣味とオスマン・トルコなどの実際の東洋を比較考察する論文³³がある。作品の東洋趣味は、ヨーロッパから

28 Sanders, Eve Rachele, *Inscribing Selves: Gender and Literacy in the English Public Theater*, (1995). MF||189||62

29 Nishimura, Kimiko, *Poetry and Poetics of Metamorphosis in Shakespeare's England: A Post-Feminist Perspective*, (1996). MF||194||8

30 Ray, Sid, *Holy Estates: Marriage and Containment in Renaissance Drama and Prose*, (1995). MF||189||66

31 Dolgin, Ellen Ecker, *So Well-Suited: The Evolution of Joan of Arc As a Dramatic Image*, (1995). MF||189||64

32 Anderson, Susan Cambell, "Steeped in the Colors of Their Trade": *Commodity, Authority, and Self-Articulation in Jacobean Popular Literature*, (1995). MF||189||78

33 Boerth, Robert, *Disorientations: The Matter of the East in English Renaissance Drama*, (1995). MF||189||74

みた、ヨーロッパ自身の自己イメージ(帝国構築願望, ヨーロッパ精神の危機) という側面があることを指摘する。

『嵐』を、テキストや、パークがフランス革命を演劇として捉えた観点や、現代の『嵐』論考などを通じて、政治との関わりを強調しつつポスト・コロニアリズム的、脱構築的論考をするもの³⁴ がある。

リチャード二世の退位シーン、シェイクスピアの『ペリクリーズ』、スペンサーの『フェアリー・クイーン』など文学作品のイメージ、当時のスコットランドやカトリック教徒といった英国の体制を脅かす勢力の反逆や反逆を正当化する考え方と結びつくことを論考し、「巨人」という語がフランシス・ベーコンの著作でも暴動を表すことなども論じるもの³⁵ がある。

34 Mitra, Udayan, *"In this Last Tempest": Reading, Re(-)creation, Re(-)presentation and the Politics of Shakespeare's Text(s)*, (1995). MF||189||70

35 Jensen, Phebe, *Literature and Political Authority in Early Modern England*, (1995). MF||189||69